

## 小川洋子論

和田 勉

一

小川洋子の文学について、生物学的な側面が表出されている作品を中心に考察したい。主に「完璧な病室」「妊娠カレンダー」「密やかな結晶」「六角形の小部屋」「薬指の標本」「沈黙博物館」を取り上げることにする。<sup>注1</sup>特に遺伝子という言葉が小説の中で用いられる時、どのような意味を持つのか。その検証を通して、現代という時代と密接に関わる小川の文学作品への理解を深めることを目標としたい。

なお、随筆集『妖精が舞い下りる夜』（平5、角川書店）の「死への遺伝子」の章に、「細胞も『自殺』するらしい。傷などを受けて壊死する通常の死とは別に、あらかじめ用意されたプログラムに従って、自らを破壊してしまう、もう一つの死に方があるというのだ。おたまじゃくしの尾の細胞が、蛙に育つ途中で消滅するのは、その典型的な例だ。（中略）生まれた時点で既に、自らを破壊するプログラムが託されていること、つまりそれだけ深く生と死が混ざ

り合っているという事実を、改めて知らされると、胸苦しい気分になってしまう」とある。ここには細胞に組み込まれた自殺、つまりアポトーシス<sup>注2</sup>について言及されている。細胞の中で特定の死の遺伝子が働いて、老化や死まで遺伝子レベルで決定されていることに、小川は胸苦しさを覚えているのである。

『小川洋子対話集』（平19、幻冬舎）に収められた五木寛之との対談「生きる言葉」の中で、小川は「遺伝子を解説していくというのは、人類にとってこれから大きな問題になっていくと思います。何歳でどんな病気になるかがわかると、もう生命保険に入れなくなるわけですよ。（中略）たとえば重い病気にかかったときに、運命という自分以外の力によって降りかかってきたと思うことで納得できたものが、遺伝子に書き込まれた地図のせいであなただけはこの病気になったんだと言われると、それは運命じゃなくて自分の体のなかに原因があると突きつけられてしまうわけですから、神様のせいにはきない。このまま放っておくとたぶんかつて神のなせる業と呼ばれ

た領域へ、科学は踏み込むことになるでしょう。いや、もうすでに踏み込んでしまったといえるのかもしれませんが」とも述べている。小川が危惧する遺伝子決定論的なことは、例えば、金子隆一が『ゲノム解読がもたらす未来』（平13、洋泉社）の中で、アメリカなどの例を挙げながら、現在を「人間がゲノム情報に支配される時代」と捉えているようなことと通底している。

## 二

それでは、作品の内容に即して、具体的に分析したい。

「完璧な病室」（平1）には、二十一歳で亡くなった弟のことを思う姉の心境が綴られている。<sup>注3</sup>表題には、弟は生前入院していた病室で完璧なまでに安らぎを与えてくれたということ、及び、消毒された病室には生活臭がないゆえに心地良さがあるということが寓意されている。主人公は、「病室にはほんの少しでも、有機体<sup>注4</sup>が残っていると我慢できない」という潔癖なところがある。

「夫は東京のはずれにある理系の単科大学の助手なので、毎日極端に帰りが遅かった。九年前、わたしたちが初めて出会った時からずっと、理学部で遺伝子の研究をしているのに、わたしは少しも彼の研究の概略や意義や成果を理解できなかった」とある。夫が遺伝子という、主人公にとって理解しにくいものを研究していることもあり、疎外感を覚えている。そもそも、余命一年程で入院している

弟とのつながりが強いために、主人公には夫とのつながりは希薄である。優しいが、食べることに無頓着で生存欲旺盛な夫に、主人公は違和感も覚えている。

弟は食欲もなくなり、ぶどうを偏食するようになる。夫との弟をめぐる会話には、「やっぱり、ぶどうばかり食べてるの?」「うん。二人とも遺伝子が、ぶどう色になりそう。」とある。身体の芯までと言うところを、「遺伝子」と言うことで、作品としての新奇さを出している。遺伝子研究者である夫との会話だからこそ通じる冗談だと、「わたし」が判断したことが窺える。因みに、弟のことと対比する形で、S医師の両親が孤児院を経営していて、幼い頃遺伝子上のつながりのない子供と兄弟のように暮らしていたことが描かれている。

「完璧な病室」では、有機体の宿命である生活に密着したものを嫌うヒロインの感性が描かれている。有機体にプログラムされた死を受け容れ難い主人公は、「無機物のように清らかに生きていくらしいのに」と思い、臨終前の弟をいとおしむ気持ちからS医師に抱かれる。<sup>注4</sup>死をプログラムされている故の孤独がなさしめた突飛な行動と言える。ただし、主人公が精神を病んだ母との生活について、「心を病んでしまった人間と暮らすっていうことは、無脳症の胎児のホルマリン漬けを食卓の真ん中に置いて食事するようなものなんです」と述べているところなど独自ではあるが、主人公の感性自体

に問題もあろう。病気の弟のバリエーションとして病気の母のことが描かれたのであろうが、家族を次々と亡くす主人公の悲しみが観念的でしかないという印象も残る。

「妊娠カレンダー」(平3)には、表題に示されたように、妊娠した姉を観察する妹「わたし」の心境や言動が日記形式で綴られている。日記は多くの場合、書き手自身に向けられており、それは、物語が複数の聞き手(読者)の前に開かれているとは異なるところである。それゆえ、日記は必然的に排他的な密室性をまとうことになり、この作品では犯罪めいた思いも綴られている。妹の内面を暴くために、この日記形式が利用されたのもごく自然な展開であつただろう。ただし、「妊娠カレンダー」は日記形式をとっているとはいえ、私小説の変種であると言うわけではなく、虚構も取り込みながら、日記形式を活かしたテキストと成り得ている。

一月八日の日記には、「つわりがこんなにも突然やつてくるものだとは知らなかった。姉は以前、『わたしはつわりになんかならないわ』と言っていた。彼女はそういう典型を嫌っている。自分だけは催眠術や麻酔にかからないと、思い込んでいるのだ」とある。姉は遺伝子にプログラムされた、万人に共通のことを「典型」として嫌い、独自の生き方をしたいと思っていたことが分かる。だが、主體的に生きようとしても、遺伝子のプログラムには敵わなかったことが示されている。

三月一日の日記には、「わたしが今、自分の頭の中で赤ん坊を認識するのに使っているキーワードは『染色体』だ。『染色体』としてなら、赤ん坊の形を意識することができる」とある。妹は姉の体内を、あくまで科学的に捉えようとする。胎児としてではなく、科学雑誌で見た二二本の常染色体と二本の性染色体として捉えているのである。

五月二十八日の日記には、売り物にならなくなって、もらったグレープフルーツのことが綴られている。「鍋の底でグレープフルーツの果肉の粒が弾けるのを見ながら、わたしはいつかゼミの友達に無理矢理連れて行かれた『地球汚染・人類汚染を考える会』の会合のことを思い出していた。(中略)一ページめに、アメリカ産のグレープフルーツの写真が載っていた。『危険な輸入食品!』『出荷までに三種類の毒薬に漬けられるグレープフルーツ』『防かび剤PW Hには強力な発癌性。人間の染色体そのものを破壊する!』あの時の一ページが、ぼんやり頭の中で揺らめいた」とある。更に、「PW Hは、胎児の染色体も破壊するのかしら」鍋の底で、怯えるように微かに震えているジャムを見ながら、わたしは思った」ともある。この作品では、姉という分身を設定することで、妹の視点から妊娠した女性の心身を相対化する試みがなされている。しかも染色体という肉眼では見えないところも、超音波装置などの機器によって捉えているところに特質がある。ただし、姉に薬漬けのグレープフ

ルーツを食べさせる「わたし」の悪意は衝撃的ではあっても、ヒロインの内面として必ずしも十分に描き出されているとは言えない。そこに同性として覚える産む性であることへの不安や怯えがこめられていてとしても、姉という他者への行為としては正当化しえまい。観念的な大学生が、妊婦というものに生理的な拒絶反応を示したといっても理由にはなるまい。幻想に耽っているにすぎないといっても、実行に移したのであるから言い訳にはなるまい。いくら過食気味の姉であるとはいえ、グレープフルーツを食べることの危険を、姉が自覚していないのであるから尚更である。ここで秘められるべき妹の内面を暴く役割は、姉ではなく、読者に委ねられている。日記の中に谷崎潤一郎の『鍵』に描かれたようなドラマを期待した読者には、「妊娠カレンダー」の姉妹のありように物足りなさも覚えるかもしれない。だが、そこには、環境破壊による食物の危機が、胎児にまで影響を及ぼしかねないということを、妹による悪意の形象化を通してメッセージとしては表出し得ている。母性が育まれていくということが遺伝子にプログラムされたものであるとすれば、妊娠ということが知性的に対応しようとする姿を描き出し得ている。母性というものに幻想的な側面があることを理性的に説明してみせたのが、この作品の特質と言えよう。

## 三

『密やかな結晶』（平6、講談社）には、秘密警察によって記憶狩りが行われるという状況の中で生きざるを得ない姿が描かれている。人間であることの最も大きな要因は脳の働きにあるだろうが、その脳の記憶が人為的に抹消される不安や恐怖が描き出されている。

遺伝子の解説についても、主人公とR氏のやりとりで次のようにある。「これはまだ、噂の段階なんだけど、遺伝子の解説によって、特殊な意識を持つ人たちを選別している、ということらしい。解説の技術者が、大学の研究室あたりで、密かに養成されているんだ」「遺伝子の、カイドク、ですか?」「そう。外見上の共通点がなくとも、遺伝子まで掘り下げて徹底的に分析すれば、何らかの共通の特徴をつかむことができるだろうね。最近の記憶狩りの徹底ぶりを見ると、その研究がかなり進展してきたということだろう」「でも、どうやって遺伝子を手に入れるのかしら」「わたしは尋ねた。「今君は、このカップでコーヒーを飲んだね」R氏は煙草を灰皿に押しつけ、わたしの目の前にカップを持ち上げた。息が吹きかかりそうなくらい近くに、彼の指があった。わたしはじっと唇をつぐんでうなずいた。「これを持ち出して、唾液を検出し、遺伝子の解説をするのは、秘密警察にとっては何でもないことさ。彼らはあらゆるところに潜んでいるんだ。もちろん、出版社のロビーの湯沸かし室にもね。知らない間に、島中の人間が解説され、データ化され、登録

されてゆく。その作業がどこまで進んでいるのかは、見当もつかないけど。僕たちはどんなに注意してたって、自分の身体の何かを、つまり遺伝子を、あちこちに落としてしまう。髪の毛や、汗や、爪や、脂や、涙や、とにかくいろいろなものもが身体からこぼれてゆくんだ。だから、のがれようがない」とある。秘密警察が遺伝子の解読まで密かに行っていたとすることで、小説に現代的なりアリティを持たせている。また、そのような状況に置かれるかもしれない恐怖を先取りして描いているとも言える。

主人公は秘密警察で取り調べを受けた際に出された飲み物について、「催眠術にかけて秘密を聞き出すための薬か、わたしの遺伝子を解読するための薬か」という連想をする。ここでは特異な飲み物に注意が向かうため、容器に付いた唾液から遺伝子を解読されてしまふのではないかと不安には連想が及ばない。主人公の他に、乾教授も「遺伝子解読研究所への出頭命令です。明日、いえ、もう今日です、今日の朝、迎えが来ることになっています。大学の職は解かれました。官舎も出なければなりません。家族全員でその研究所へ移り住むよう、命令されています」と「わたし」に告げ、身を晦まして隠れ家に潜伏することになる。

『密やかな結晶』では、厳しく統制された状況下で、しかも記憶や身体が消滅するという設定の中で、創作に携わる者の苦しみが描かれている。前半に描かれた記憶の消滅に比べると、後半に描かれ

た身体が消滅は独自ではあってもリアリティには欠ける。身体が消滅は、たとえ身体は消滅しても物語は残るという意図で書かれたのであろうが、そこに外部世界との因果関係に欠ける面があることも否定できない。この作品には、言論を封殺された全体主義的な状況への風刺が露わであり、それは小川の関心に絡めて言えば、ナチス政権下でのアンネ・フランクの苦しみに通じるとも言える。表題には、閉塞された状況においても、かつての良き時代に確固として存在していたものたちへの愛着は消し難いという思いが込められている。喪失したものへの強い哀惜の念、消滅したものへの揺るぎない信頼が、密やかながら綴られている。

なお、『密やかな結晶』の主人公が今書いている小説の中では、タイプライターの教師は、恋人であるヒロインを含めた生徒たちの身心を自己の思うままに操っていると思ひ込んでいる。これは統制された状況に生きる主人公のバリエーションとして表されており、入れ子型構造となっている。

『密やかな結晶』は、ストーリーテラーとしての小川の才能が巧みに駆使されているが、作品にどれほどの説得力があるかということになれば、問題もないとは言えない。特に作品の舞台背景である「島」が、管理する側の国家的なイメージを形成し得ているかどうかという点である。このような秘密警察が村落共同体的な単位で活動するとは考えにくく、そうすれば「島」とは島国日本の寓意と捉

えるのが妥当だろう。秘密警察は、第二次世界大戦中の特高のイメージも連想させるだろうが、当時の検閲なども現在では露わな形ではないと言える。『密やかな結晶』は遺伝子の解説も取り込んだ近未来社会を寓意しているのだから、もう少し高度情報化社会にふさわしい社会的、政治的な視点や広がりを求められるのではないだろうか。主人公を始めとした登場人物たちの消滅したものへのこだわりに力点が置かれているが、消滅をもたらした背景の社会状況にどれだけリアリティがあるかということも重要であろう。社会状況と拮抗する要素が弱ければ、空想性が強まってしまふからである。更に付け加えると、主人公の周辺にいる「おじいさん」や「R氏」などもあまりにも善良な登場人物たちであり、このような極限状況下にしては、その言動が少し現実離れし過ぎている。いくら主人公の同志であるとは言え、もう少し複雑な内面を抱え込んでいる方が、魅力ある人物像となり得たと思われる。

「六角形の小部屋」（平6）には、「わたし」が「ミドリさん」を見かけた第一印象として、「ただぼんやりと、膝の上に置いた自分の両手や、ソファのしみを眺めているだけだった。スポーツクラブの更衣室からはあまりにもかけ離れた問題——例えば昨夜読んだ推理小説のアリバイトリックの矛盾点についてとか、ヒトの遺伝子の全塩基配列を解説する方法についてとか——を思案しているようでもあったし、また、何にも考えていないようでもあった」とある。

スポーツクラブで見かけたミドリさんの印象について、「ヒトの遺伝子の全塩基配列を解説する方法」に連想が及ぶところに「わたし」の特質もある。医科大学の事務室に勤めていることもあって、他者の表情を遺伝子の解説を思案するという特異な比喻で捉えている。

表題には、語り小部屋、つまり心に思うことを一人で言葉に出して語る部屋という意味が込められている。六角形は、「六角堂」や「六角仏」からの連想であろうし、そのような生死に関わることに、主人公のみならず読者の意識も向かうように仕掛けられている。主人公の「わたし」は、この部屋で「運命について考える場合一番りやすいのは寿命だと思おうのですが、人間の寿命は生まれた時から既に定められているのでしょうか。死ぬ日は遺伝子に組み込まれているのでしょうか」と、自己の考えを吐露する。主人公が運命について考える際に、依拠する科学的な要素として遺伝子が持ち出されている。人間の寿命について、単なる運命論者ではなく、自己の内にプログラムされた遺伝子によるものと捉えているところが独自である。

「わたし」は、「もしあの時美知男が転ばなかったら、わたしたちはうまく続いていただろうか、と考えることがあります。でもそんな想像無意味です。彼を憎む運命は遺伝子が作られた時から既に定まっていたのでしょうから」とも語る。恋愛においても、遺伝子に定められたことを重視していることが分かる。主人公は自己の運命

を科学的な客観性によって納得させようとしているが、その実は、本人が他律的な性格でしかないと捉えることができる。ここでの遺伝子は、体質的に相性が合わないというような文学的レトリックに近い。それでも、不確定な未来に確定的なものを見出そうとする若い女性の心情は、遺伝子によって自己の運命は決定されていると思いを込めとして表出されている。自問自答の形を取っているが、語り小部屋は、普段人前では口にしないような内容のことを呟く上で効果的に働いている。だが、主人公「わたし」が語り小部屋で語った内容は、他の登場人物たちには聞かれないままである。彼女の内面を知る役割は、結局のところ読者に委ねられているが、それも技法としては効果的に働いている。それは、主人公がミドリさんと老婦人を尾行するシーンについても言えることである。この尾行も、二人に意図的に誘導されたのではなく、二人に知られないまま興味本位に後を付けたのであろう。

「薬指の標本」(平6)には、標本作りを仕事とするところで働くことになった女性が描かれる。有機物のみならず、無機物も標本の対象とされる。標本として保存することで、依頼する客は救済されるのである。かつて有機物であったものが命を失った後も標本として保存されることに、登場人物のみならず、小川にも強い関心があることが窺える。

文鳥の骨を依頼した老人が描かれたところには、「あれ以来、文

鳥の標本はどうしてる？」仕事を始める用意をしながら、おじいさんは言った。「ええ、303号室に丁寧に保存されていますよ。骨というのは、標本には適した素材のようです。保存液の中では、骨の白さや滑らかさが、一層際立って見えますからね。いつでも自由に、ご対面にいらして下さい」とある。この老人は、履いている靴がヒロインを束縛し、侵食する危険性があることを指摘する役割も荷っている。表題に示されたように、薬指にコンプレックスを持っている「わたし」は、そこに触れられると拘束されたような状態に陥っている。

結末では、「わたし」が火傷の少女と同様に、弟子丸によって標本にされ、永久に保存されることが暗示されている。「わたし」の履く靴によって拘束を強めていった弟子丸は、ついに「わたし」を若のまま保存して眺めることになる。ただし、ヒロインの心理や謎めいた弟子丸の人物造形が不十分であるため、標本にされるに至るストーリーの展開に不自然さも残る。標本技術師である弟子丸という職業柄からだけでは、奇異な行動をとる弟子丸の内面を説明したことにはなるまい。女子専用アパート時代の浴場を秘密の安息所としているところなどで、弟子丸についての造形はある程度は為されている。それでも、女性の身体を標本として保存したがる性癖を持っている男性の心理に、更に焦点を当てて必要があっただろう。そうでないと、剥製として保存することへの固執というストーリーの展

開のために、登場人物の言動が操られているというような印象を拭くことはできない。<sup>注</sup>有機物であるヒトを在りし日のまま永遠に保存するという独自のところに降り立っていることは評価できるが、犯罪にも抵触する側面があるのだから、ヒロインの内面も含めて細密な心理描写が求められたらう。

『沈黙博物館』（平12、筑摩書房）では、主人公「僕」の人格形成において、少年時代に顕微鏡を通して見た細胞の世界が、大きな影響を与えたことが示されている。顕微鏡によって、肉眼では見えない「精巧で美しい世界」を知り、「自分の知らない場所にも世界が隠されていた」ことを認識したというのであり、そのことは、現在の博物への興味へもつながっている。結末が、「形見の物語を、僕は語り始めた」となっているが、これは老婆を看取って、もはや博物の世界から抜け出せないと覚悟した後、冒頭に戻って語り始めたということである。漱石の『こゝろ』と同様に、結末から冒頭へとつながる円還的構造になっている。

「僕」が一緒に仕事をしている庭師や少女との会話の中にも、顕微鏡を通して見た細胞のことが、次のように描かれている。「『じゃあ、技師さんに世界のあり様を教えてくれたものは何？』『顕微鏡かな』少し考えてから僕は答えた。少女と庭師は同時に「へえ……」と声を上げた。『顕微鏡でどうやって、我慢や屈辱や犠牲や嫉妬を学ぶの？』『そうだなあ、うまく説明できないけど、レンズに映る

生物の細胞の中にも、例えば犠牲だって嫉妬だってあるんだ。今度、遊びにおいでよ。見せてあげるから。』とある。実際に「僕」は少女に、顕微鏡で「カエルの口腔上皮細胞」を見せたりする。このように、顕微鏡を通して見た生命の神秘が、「僕」の人格形成に影響を与えたことが、他者とのやりとりの中でも示されている。

「僕」の生き方に感化を与えたのは、現在は理科の教師になっている兄の存在が大きい。かつて兄の指導で顕微鏡を通して見た「ムラサキツユクサのオシベの細胞」に触発された博物への興味は、現在でも顕微鏡を通して「アカムシの染色体」を観察するなどの行動となって現れている。因みに、この兄の妻は出産を控えており、「僕」が次第に死後の世界に親しみを覚えていくのと対照的に、兄はあくまで生の世界に留まっている。兄夫婦への出産祝いに、「僕」は「再生のシンボル」として少女が選んだ「卵細工の飾り」を送っている。だが、このプレゼントは庭師の企みで、兄の元には届いていないことが判明する。「僕」の出した手紙も「宛先不明」として返送されてしまい、両者の間は隔たってしまうのである。「僕」はあの世とこの世の間、つまり三途の川のような所に佇み、「世界の縁は暗くてとてつもなく深い」ということを認識するのである。

『沈黙博物館』では、限りある生命体へのいとおしさが、形見の保存として博物への興味につながっている。結末の来館者がゼロであるために、きれいに保存されているというイロニーも効果的であ



る。ただし、いくら「燻蒸」されるとはいえ、有機物が持つ死穢の醜さそのものに触れていない物足りなさも残る。

すべての人に死が運命づけられているので、博物館の収蔵品は増えていくばかりである。かつて存在していたことの証としての形見への執着であり、このような作者のテーマは寓話小説として巧みに表出されている。特に蓄積された時間によって価値ある存在となった老婆は、あの世とこの世の間に在る人としても魅力ある造形が為されている。ただし、この作品の背景の空間や時間が意図的に曖昧にされていることや、主人公の若い男性の心理描写が不十分であることなどによって、作品としてのリアリティや説得力に欠ける面があることも否定できない。博物への興味に執着する主人公の特異な内面について描き足りているとは言えず、物語全体の視点人物としての機能が中心にならなっているところが惜しまれる。「僕」はこの一種異空間とも言える世界の視点人物、語り手としての役割が主で、魅力ある主人公としてどれほど造形されているだろうかということである。「博物館技師」という主人公の職業によって、その人柄や性格などの説明が補われているところも窺えるので、あくまで個々の具体的なエピソードなどによって描き出すべきであっただろう。

なお、『沈黙博物館』の巻末で、小川は博物館関連の「参考文献」を挙げている。それらとの関わりで述べると、西野義章『博物館学——フランスの文化と戦略』（平7、東京大学出版会）には、「国際

博物館評議会」の規約として、「博物館とは、公衆に開かれ、社会とその発展に奉仕し、かつまた、人間とその環境との物的証拠に関する諸調査を行い、これらを獲得し、それらを保存、報告し、しかも、それらを研究と、教育と、レクリエーションを目的として陳列する、営利を目的とせぬ恒常的な機関」と定義されているとある。これは、『沈黙博物館』の冒頭で主人公が面接を受け、老婆から博物館の定義を述べるように言われた場面に反映している。主人公がこの規約をほぼそのまま踏まえて答えると、老婆は、「ふん、つまらん。国際博物館評議会の概念規定を、暗唱しただけじゃないか」と幻滅を露わにする。そして、老婆は通念に囚われない独自の博物館造りを目指すべきだと述べ、物語は展開していくことになる。『博物館学——フランスの文化と戦略』には、フランスにおける公的な博物館の実情が記されているのに対して、『沈黙博物館』では、社会に認知されていない、あくまで私的な博物館造りが構想されていることになる。

チャールズ・カイトリー『イギリス歳時暦』（平7、大修館書店）には、十七世紀のイギリス人の民間伝承が暦の形で綴られている。「17世紀だけでも2000種類以上の暦が発行された」し、その「総販売部数が年間数十万部にも達して、聖書の部数を軽く追い越してしまつた」ともある。多様な暦が発行されたということは、『沈黙博物館』に描かれた老婆の造形において、「独自の暦を作っていて、

人の都合にお構いなく、それを一番に優先させて生活している」というようなところに反映されている。「老婆が暦に基づいたその一日の注意事項を高らかに披露」して、作業は始まるのである。「イギリス歳時暦」には、「暦のなかにはまた、占いや観相術の初歩的知識を伝えるものもあり、それによって読者は乳児の運勢を予測したり、初めて会う人の性格を、その耳の形状から推測することができた」ともある。耳の「形状」ではないが、耳の大きさとして、「沈黙博物館」の登場人物が成人であるかどうかを計るところで参考にされている。

イーディス・ホールデン『カントリー・ダイアリー』（昭55、サンリオ）では、「岩に坐って 湖や丘に思いを寄せ／森の影深い場所を しずかにたどる／（中略）ただひたすら 自然の呪文に耳を傾け／そのゆたかな祭典に眼をこらすだけ」というように、自然を観察し、詩的な文章が添えられている。『カントリー・ダイアリー』には植物や動物の挿絵も多く盛り込まれており、『沈黙博物館』では、老婆の暦に「イラストも見受けられ、それらは淡い色調で色付けしてあった」というところに参照されている。

#### 四

小川の作品には、遺伝子の乗り物にすぎないかも知れぬ生き物を、剥製の形で永遠に保存することへの興味や執着が窺える。芥川龍之

介が自嘲的に述べた「剥製の白鳥」（『或阿呆の一生』）の世界を、小川はむしろ自ら作り出そうとしたふしが窺える。小川は血の通っていない標本の世界、無機質の世界を、自ら意図的に作り上げようとした。そこには、フェテシズムへの嗜好が露わであり、永遠なるものへの願望の投影が見てとれる。有機物である人間の哀しみを透徹した眼差しで見つめ、果たして人間は後世に何を残し得る存在なのかと問いかけている。それは、安部公房が文明社会の廃棄物から人間とはどういう存在かと問いかけたのと同様に、小川は亡くなった人たちの遺品から、人間存在のありようについて問いかけている。しかも、現在において人間について考える際に、分子生物学などを含めた自然科学の成果を踏まえて捉えようとしている。ただし、小川の用いる遺伝子は、生物学的な解釈にはいるが、むしろ文学的な象徴や隠喩ともなっており、アイデンティティや対人関係などを意味づける一つの文学的手法とも言える。

小川の小説においては、何が書かれているかということと共に、どのように書かれているかということも重要である。『博士の愛した数式』で、数式を愛した博士に託されたことは、永遠なるものへのつながりである。それは、まさに人間の命のはかなさ、愛のはかなさの対極にあるものと言える。その意味では、数式は、「薬指の標本」や『沈黙博物館』に描かれた剥製とアナロジーである。剥製へ執着するところには、小川が現代文学において何を表現できるの

かという対象の問題、及びどのように表現できるのかという方法の問題を模索してきた姿を窺うことができる。

日記体小説と言える「妊娠カレンダー」、告白体小説の要素を持つ「六角形の小部屋」、書簡体小説の箇所を含む「沈黙博物館」等では、日記に綴られた内面や部屋で語られた告白や兄への手紙が、他の登場人物には届かず、そのまま読者に提供されている。読者は他人のディスクールを盗み読み、もしくは盗み聞きする形となっているが、そのことが物語の説得力を高める上で効果的に機能している。日記や手紙といった形式の持つドキュメントとしての価値によっても、内容は補強されたと見ていいだろう。

小川はヒトがこの世に存在しているのは、滅びに向かう過程として捉えている。例えば、「私たちも、世界にあふれる様々な物質によって、分解されつつある」（『沈黙博物館』）と表出されている。

また男性を描く際にも、生身の身体そのものとして捉えているところに特質がある。例えば、「わたしは自分の気持ちの中で一番むごい所を口にする時でも、やはり彼の水泳選手的な筋肉の美しさを思い描いていた」（『完璧な病室』、傍点引用者、以下同じ）や「骨組みがしっかりし、肩幅が広く、セーターの上からでも肩甲骨が元氣よく動いているのが分った」（『六角形の小部屋』）というように表出されている。そこには、人間存在を科学的に捉える視線が投影している。

『密やかな結晶』や『沈黙博物館』等に顕著なように、小川の小説では、背景の空間と時間が意図的に曖昧にされているが、ここには一長一短があると言えよう。人間がいる限り、いつでもどこでも同じようなことがあるという普遍性は獲得するかも知れないが、逆に特定の地名や時代の持つインパクトがない分、リアリティや説得力に欠ける面がある。小川の意図は、どこかの地域のお伽話のような雰囲気を出そうとしているところがある。そこには、国や時代、あるいは作家を越えてテクストに反復される〈物語の記憶〉につながるという意図が窺える。<sup>注</sup>

#### 註

注1 これらの他にも、『凍りついた香り』（平10、幻冬舎）には、「壁には鳥類とも魚類ともつかない、不思議な標本が掛けてあった」等とあり、『ラフマンの埋葬』（平16、講談社）には、生物の教員が登場する。いずれも部分的であるため、本稿では詳しくは取り上げない。

注2 田沼靖一は『死の起源 遺伝子からの問いかけ』（平13、朝日新聞社）の中で、「アポトーシスは、細胞がさまざまな情報を総合的に判断して、遺伝子の働きに基づいて行なわれる細胞死の過程である。その意味では、アポトーシスは細胞自身に生まれつきそなわった、自らの死を自らが決定する細胞の消去機能である」と要約している。

注3 姉と弟という設定に関連するが、小川は『博士の本棚』（平19、新潮社）の中で、「小説であれ映画であれ、兄弟の物語ならそれだけで私は参ってしまう（中略）血のつながりに親子ほど惑わされることはなく、恋人同志のように肉体的なつながりで何かを解決できるほど単純でもない。

残酷に切り捨てようとしても、互いの存在の記憶は遺伝子に刻み込まれ、消しようがない」と述べている。

注4 『妖精が舞い下りる夜』の「小説の向こう側」の中で、小川は「『S医師』に抱かれることは『弟』に抱かれることだ、という主人公の思い」について述べている。

注5 川村湊も「今月の文芸書」(『文学界』平3・6)の中で、「妊娠カレンダー」について、「姉に対する妹の『いまわしい』悪意には、ストーリー的にいえば、ほとんど根拠は見出せない」と述べている。

注6 水田宗子は「〈消滅〉と〈密室〉の物語——小川洋子著『密やかな結晶』を読む」(『週刊読書人』平6・3・18)の中で、「島という設定も、日本のメタフォアでもありながら、それ以上に、外界から遮断された場所、孤独な秘めやかな場所のメタフォアである」と述べており、井坂洋子は「密やかな結晶」(平6、講談社文庫)の「解説」で、「焚書、隠れ家、記憶狩りや秘密警察の存在などから」「ナチのユダヤ人狩りを連想する」と述べている。背景の時空間を意図的に曖昧にしているのが、この作品の特質である。

注7 随筆『深き心の底より』(平11、海竜社)の第六章「神の存在を感じるとき」の中でも、「遺伝子の説明がすみ、例えば発病前の未来の病が予測できるような、かつては運命と呼ばれていた領域へ科学がどんどん侵略してきている現代において、神の存在を守るのは、排除より許容かもしれない。なぜなら、運命は自分の心とは無関係に、どこか遠い空の一点から降り注いでくるものだったのに、遺伝子はまさに自分自身の内側に存在しているからである。誰にとっても自分を否定するのは苦痛なはずだ」と述べている。

注8 小川は、インタヴュー「なにかがあった。いまはない。」(『ユリイカ』平16・2)の中で、「登場人物たちは私が作ったある場所に閉ざされているわけですが、その中の密度が濃くなってゆくにつれて、つまり彼らの異常さや狂気があぶり出されるにつれて、自分の空間の中に世界を引っ張り込もうとしはじめます。(中略)世界のすべて、である限り、

時間や空間の出自が異なるものでなければなりません。そうでなければ彼らは快感を得られません」と述べている。ここに述べられた観念的な内容が、どれ程説得力があるかということも関わっている。

注9 小川は、インタヴュー「なにかがあった。いまはない。」の中で、「はるか昔の、もはや誰ひとり記憶していない、しかしたしかに存在した遠い過去の物語」を提示し、「読者に、自分はもう失われてしまった物語をいま読んでいるのだ、という錯覚を起こさせる小説」を書きたいと述べている。